心肺蘇生法に神様は必要か？

　迂闊だった。と、俺は自分を責める。

　良く考えてみれば、『ガデスクリスタル』なんていう重要なものを、昨日戦ったような下っ端風情が持っているはずがない。

　そんな当然の事にも気がつかなかった過去の自分を叱り飛ばしながら、俺は同時に驚いていた。主に、相対している『敵』の姿に対してだ。

　一言で言えば、『ほぼ人間』と言ったところか。性別は……妖精モドキの話では、そもそも『性別』という概念が存在しないらしいが、敢えて決めるなら、間違いなく男だろう。

　人間で言えば、恐らく二十代後半といったところか。やたら露出度の高い、まるで竜の鱗のような、黒い鎧に包まれた若々しい肉体は程よく引き締まっている。鋭い切れ目のような細い目から覗く青い眼が、俺を射抜かんとばかりに光っていて、それが嫌でも俺をビビらせる。肩まで届いた白髪も逆だっており、彼の持つ威圧感を遺憾無く発揮しているのだ。全身の毛が立つような、そんな感覚だった。

「……あんた、誰だよ」

　もうすでに『撤退』の二文字が俺の頭を占めるものの、俺はそう聞く。

「……人間風情が、俺に名乗れと？」

　明らかに敵意のあるバリトンのきいた声が俺の鼓膜を揺らした瞬間、俺は思わず後ずさっていた。

　ああ、ヤバイわ。こいつ、昨日のテュポーンの比じゃないくらい、強い。

　そう思いつつも、俺は震える唇を開いた。

「……そうだな。名前を聞いたのは俺だ。なら、俺から名乗るのが礼儀ってもんか。俺は、神野瞬」

「名乗ったところ悪いが、生憎貴様の名前に興味は無い。だが……」

　男はそこで言葉を切ると、俺と違って毅然としている妖精モドキの方に目を向けた。

「宮殿の召使が、どうして人間と一緒にいるのかは、大いに興味を引かれる」

「随分な言い様ですね、クレイオス」

　どうやら、妖精モドキはこいつの事を知っているようだ。一体どういう関係なのだろう？　まさか昔はカレカノの関係だったのだろうか……なんて考えが一瞬頭を過ぎったが、すぐに思い直す。妖精モドキがクレイオスに向ける目は冷ややかで、声もどこか冷たい。

　何というか、一度でもそんな仲になった間柄にはとても見えなかった。

　まあ、それはおいておいて、だ。

「クレイオス……？」

　どこかで聞いたことのあるような名前に、俺は思わず妖精モドキに疑問の声を上げた。

「ええ。こいつは、タルタロスに幽閉されている、ティターン族の一人です」

「ティ、ティターン？」

　そう言われ、俺は思わずクレイオスを見る。ティターンというのは、確か『巨人』のことだったような気がするのだが……確かにクレイオスは長身だが、とても『巨人』と言うには小さすぎる気がした。

「まあ、詳しい事は後で話すとして……瞬様。さっさとこいつから『ガデスクリスタル』を取り戻しましょう」

「いや、簡単に言うなよっ？」

　妖精モドキが言うのは、つまり俺に「さっさと心臓を止めてくれ」と言っているようなものなのだが……流石に無策で突っ込んだら、殺される未来しか見えない。

　同じことを、クレイオスも思ったようだ。

「宮殿の召使、一体何を考えている？　その人間からは、大した力は感じられんが……」

「当然です。だって、彼は所詮前座ですから」

「おい」

　妖精モドキのあんまりな言い草に、俺は思わず突っ込む。

　確かに俺は前座ではあるのだが、それをこいつに言われると、ちょっとカチンときてしまうのは致し方ないだろう。

　そんな俺の気持ちを察してか、クレイオスの表情もどこか引き攣っていた。

「……まあ、貴様等がそれでいいのであれば構わん。冥府に行った後で、己の愚かさを恥るがいい」

「おい、どうすんだ妖精モドキ？　こいつを相手に、心臓を止める策なんて何も無いぞっ？」

「大丈夫です、瞬様」

　俺の悲痛ともとれる叫び声に、妖精モドキはキラリと白い歯を見せて言い放った。

「クレイオスは確かにティターン族の一人で、昨日のテュポーンよりは強いですが……大差無いです。瞬様なら、楽に心臓を止められます」

　おい。それ、あいつに聞こえるような範囲で言っていい言葉じゃないんじゃ……と、恐る恐る俺はクレイオスの方に顔を動かす。だが、妖精モドキはそれを気にする風でもなく、

「大体、クレイオスは確かにティターン族ではありますけど、他の奴等と比べて、明らかに力不足なんですよ。何かをやらかした訳じゃありませんしね。ヘッポコピーなお坊ちゃんです」

「火に油を注ぐなぁぁぁあっ！」

　チラリと見えたクレイオスは、明らかに額に青筋を浮かべていた。

　小声で、「こいつ等……コロス、絶対コロス」とか言っているあたり、余程頭にきたらしい。

　一応、俺は特に何も言っていないのだが……この様子を見る限りでは、どうやら妖精モドキに言われたことを、かなり気にしているようだ。

つーかヤバイ。本当にヤバイ。

こちらに突っ込んできたクレイオスは、どこから取り出したのか、黒光りする、巨大な剣を担いでいた。目測で、全長二・五メートルといったところだろうか？　あんなものに当たったら、心臓を止めるどころの話では無い。

だが、そうと分かっていても、俺にはどうしてみようも無かった。

為す術もなくそこに突っ立っている俺に接近してきたクレイオスは、唸り声と共に、大きく振りかざした剣を俺に向かって振り下ろす。